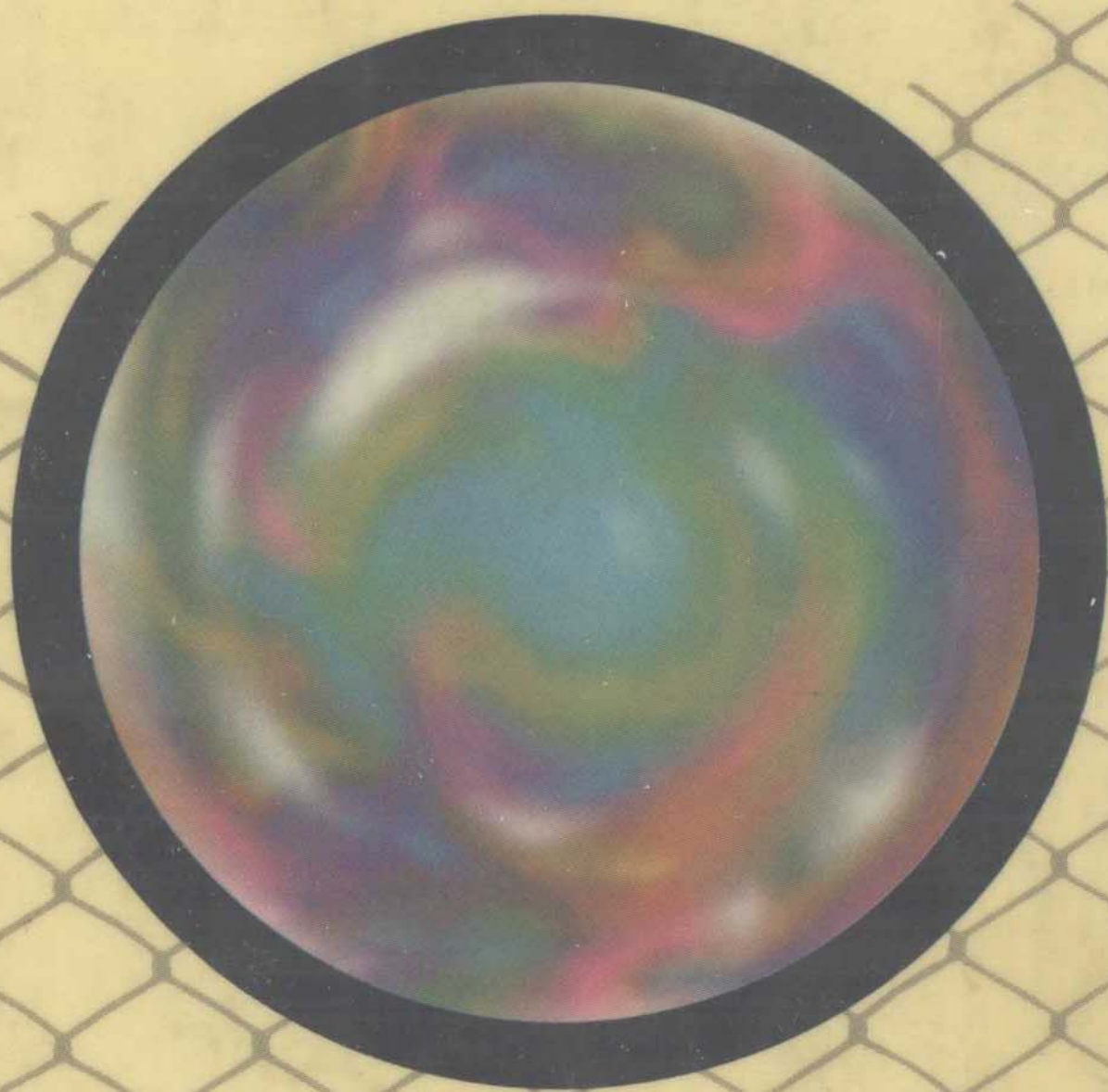


不可觸領域

半村 良





文春文庫

定価はカバーに表示してあります

不可触領域

163—1

1976年1月25日 第1刷

1979年7月5日 第100刷

著者 半村 良

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 丁102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

不可觸領域

半村良



日本財団支援

目次

不可触領域 5

虚空の男 201

不可觸領域

第一章

一

その日、伊島が高嶺温泉から中原市へまわったのは、駒田敬子が中原市の伯父の家へ来ているせいであった。

敬子の伯父は、中原市の市会議員をしており、家業はそのあたりの素封家に多い木材商であった。

その駒田嘉平と伊島は、すでに東京で三度ほど会っている。

敬子の父親は八年前に死んでいて、それ以来伯父の嘉平が後見人のようなことになっていたから、敬子と婚約した伊島が彼に会ったのは、ごく自然のなりゆきであった。

伊島と駒田嘉平は、初対面からなんとなく話が合った。どちらも商売が建築に関係していたし、釣りやゴルフなどの趣味でも話が合った。海よりは川の釣りが好きで、ゴルフの腕前も似たようなものだった。

伊島と敬子の恋がはじまったのは、二年ほど前である。敬子の母親の久江は、はじめの内あまりいい顔をしなかったらしいが、駒田嘉平が伊島に会ったあと、急に二人の結婚に積極的になった。

「お母さんて、まるで主体性がないの」

敬子は母親の変わりようをそう言って笑った。

「伯父が、あれはいい男だ、ってあなたのことを褒めたら、コロッと態度が変わっちゃうんですものね。昔の女性って、みんなあんな風だったのかしら」

自分ではいっぱし新しぶってそんなことを言うが、敬子も芯はひどく古風なところがあり、伊島はどうやらその古風なところに魅かれたようであった。

亭主に皿洗いを手伝わすような妻を持つ気にはなれなかった。新婚直後のままごとめいたことならともかく、そんなことは一人前の主婦としてはひどく貧しいことのように感じている。早くに母親に死なれ、父親の手で育てられた伊島は、妻というより主婦に対して、家を守るといった古いタイプの女を求めていたのである。

敬子の母親がまさにそのタイプで、敬子は母親の古めかしさを笑いながら、実はそっくり同じものを引き継いでしまっているようであった。

ところが、敬子を恋人として悪友たちに紹介すると、誰も彼女のそういう古めかしさには気づかず、しなやかに伸びた脚線や、鋭く突きだしているバストの形に惑わされ、

「人妻風のおしゃれをするようになったら、きつとえらくセクシーな女になるぜ」などと、多少やっかみまじりに言う。

頬の肉の薄い、鋭角的でモダンな顔だちの裏にかくされた、そういう古風な性分を自分だけが見抜いたという満足感があって、伊島は悪友たちの言葉を聞くのが愉しかった。

高嶺温泉から西尾湖沿いに中原市へ入ると、恒例の湖上祭が始まった市内の目抜通りは、華やかな飾りつけが秋の陽を浴びて、爽やかな活気に溢れていた。

今ではすっかり有名になった中原市の湖上祭も、もとはこの辺りの村々で古くから行なわれていた、ごく平凡な秋祭りにすぎないという。

ところが十何年前、中原が市になると、観光開発の目的で市内の西尾神社を中心に、湖上祭が行なわれるようになった。

歴史的にはまったく根拠のない西尾湖の湖上祭が、レジャー・ブームの潮流にのって、数年後には盛大に観光客を呼び集めるビッグ・イベントになってしまったのだ。

青葉が原から妻引峠^{つまびき}をへて直接国道十七号線に合流する、曙^{あけぼの}高原スカイラインが建設されたのも、その途中にある濁沢峡谷^{にごりやわ}が観光地として開発されたのも、もとはと言えば中原市の湖上祭の大成功があったおかげである。

駒田嘉平は、その湖上祭の発案者の一人で、今では市議会でもボス的存在になっているらしい。家は市役所などのある中心街から少しはずれた酒屋町^{さかやまち}の湖畔にあり、美しく手入れされた生垣を

めぐらし、商売物の銘木をふんだんに使った、洪く落着いた構えであった。

伊島は生垣に沿って道路から右に折れ、湖に突き当る土の道へ車をのり入れた。秋の陽ざしを受けてまばゆく光る湖の向うに、対岸の山がひどくくつきりと見えていた。

背後の西尾神社の辺りからは、祭り太鼓の音が響き、右手の湖畔広場のほうの空で、つづけざまに花火のはじける音がしたりしている。

伊島は車をのり入れた土の道を見まわし、邪魔になりそうもないことをたしかめてから車を離れた。

車はシボレーのステーション・ワゴンで、ボデーに、伊島インテリア設計、と白い文字が入っている。

入って来た生垣沿いの道に戻って通りへ出ると、駒田家の数寄屋風の門の前で、ヒップボーンのスラックスにうすい長袖の丸首シャツを着て、赤い鼻緒の駒下駄をつっかけた敬子が手をあげていた。

「ここ、すぐ判った……」

車を入れたのが生垣ごしに見えたらしい。

「判りやすい道順だから……それにしても、小ぎっぱりとしたいい町だなあ」

伊島はあらためて道の左右を見まわした。

「伯父がお待ちかねよ。お祭りに出なきゃいけないのに。よっぽどあなたがお気に入ってるの

ね」

敬子はうれしそうに言った。

どうもそのようであった。高嶺温泉にできる新しいホテルの仕事も、駒田嘉平が紹介してくれたものである。伊島はその礼もかねて仕事の帰りに寄ったのだった。

二

中原市の古い町なみは、西尾神社のある西尾山のふもとにかたまっていて、以前はそこから西尾湖にかけて、一面の畑だったらしい。

新しい中原市の中心街は、その畑だった場所にあたり、都市計画を進めるには至って好都合だったという。

そのために、道路も広く、下水道なども完備されて、清潔な小都市に成長している。

目抜き商店街の外観も、木材の産地として土地に根づいた、和風の重厚な様式をうけつぎ、華美を競うよりは民芸調のおもむきに趣向を凝らせている。

焦茶色の太い角材に煉瓦を組み合わせた外装などが、そういう商店同士の競争の中で自然に流行しはじめているらしく、専門家の伊島が驚くような新しい傾向が生まれていた。

湖上祭にしても、美人コンテストとかパレードとかいう一見新しげなものはなく、どこかの古

代遺跡から出土した一人のりの刳り舟を二、三十艘も復元し、それに裸の若者をのせて競漕させる、御靈渡みたましなどという行事が中心になっている。

それなどは、いかにも古代の勇壮さをしのばせるようだが、実際には駒田嘉平らのアイデアによって生まれた水上ショーなのである。偶然とは言いながら、それがカヌー競技の普及と古代史熱にぶつかって大成功を納めているのだから、中原市のブレーンというのも相当なものである。

「どうです。われわれ田舎もんの知恵も、そうみすてたものではないでしょう」

日暮れ近くまで祭りを見物して酒屋町の駒田邸へ戻ると、湖がみわたせる十畳の部屋で、和服に着がえた嘉平がそう言って笑った。みごとな黒漆うるしの座卓には、いかにも祭りの宵うたげの宴らしく、料理の器うつわがにぎやかに並んでいた。

「もう少し暗くなると、今度は花火ですよ」

嘉平は伊島に酒をさしながら言った。歳は三十近く違うのに、伊島を友達あつかいするのが楽しいらしい。

「変にバタ臭くないのが成功の原因でしょうね」

伊島はそう言って酒を受けた。

「実は、この中原というところは、余り有名な人物を出しておらんですよ。有名なのは明治の学者の新藤龍泉博士くらいなものですよ」

「銅像がありましたね。西尾神社の下のほうに」

「まあ、郷土の誇りと言ったらあの人くらいなもので……。祭りを考えたときも、なんとかして新藤龍泉博士をからませたいと思ひましてな。あれは考古学の大先達でしょう。それでこういうことになったのです。まあ、結局はそれがよかったわけですが」

「それにしても、御霊渡^{みたま}しの絵葉書まで売りだすなんて、インチキがひどいんじゃないのかしら」

昼間とはうってかわり、しとやかな和服姿になった敬子がからかった。

「いや、あれが案外うけておるのですよ。判らんものですなあ。しかし、今の若者たちが、作りものにもせよ湖上祭のような古代調の行事に魅力を感じはじめているというのは、面白い現象ですな。物、物、物……科学万能で来た反動でしょうか。何か今の若い人の間には、科学を超えた、心の力のようなものに対するあこがれが出はじめているのではないのでしょうかね」

「そういうことはあるでしょうね」

伊島は鯉のあらいに箸^{はし}をつけながら答えた。

「公害、物価高……そういうものは、みんな科学の、いや、物質文明の行きすぎから起っている。そう感じているんじゃないでしょうか。政治に対する不信だって、政治がそういうものを維持しようとするからなんでしょう。もっとも、政治というものはそういうものだと思いますよ。いつの間にか宝が石ころに変わっていても、いつまでもそいつをかかえている。若い連中の間で、運勢判断だの念力だのというのがはやって来たのも、そういう政治不信と同じものにつながって

るようですね」

その時、ヒューッと鋭く風を切る音がして、ドーンと大きな花火が湖上の空にひらいた。

駒田嘉平は身をよじってその美しい輪を見守った。

「よし。風もなし、花火にはうってつけの夜になりそうだ」

「あと二日、この天気が続くといいですね」

伊島が言うのと嘉平は事もなげに首を横に振った。

「わたしら土地の者は、ここの天候ならテレビの予報よりよく当てます。南の山に雲があって朝夕の風がなぐ時は当分晴れ。そのかわり、そういうときは山仕事には向かんです。ことに今ごろは、霧がかかりやすいですよ」

「西尾神社のずっと上のほうに、高い鉄塔が見えていました……」

伊島が言いかけると、駒田嘉平は得意そうに何度も頷いた。

「あれはテレビ塔です。あそこで受信して、中原市内の全家庭へ持って来ているんです。このあたりは山かげになるものですから……おかげで綺麗な画像で見れますよ」

「この見事な都市計画と言い、湖上祭といい、中原市というのは、よほど市民の気が揃っているんですね」

「まあ、そうせねば市として立って行けませんからな」

駒田嘉平は謙遜してみせたようだった。

「スーパーもおやりなんですね。中央通りで拝見しましたが、高い時計台があって……」
「いやあ」

駒田嘉平は頭を掻いた。

「随分以前のことですが、これからはスーパー・マーケットの時代だといくら言っても、誰もやりてがおらんのです。旧弊な土地柄ですから。それで、わたしがとうとう自分ではじめたと言うわけで……最初の内はパツとしませんでしたが、おいおい成績もあがって来まして……だがそうなると、いろいろ言う連中も出て来ますし、安く売るというのもむずかしいものです。時計台をごらんになったのなら、あそこが有線テレビ……中原CATV局と言うんですが、そのセンターになっているのに気づかれたでしょう」

「ええ。市役所のニュースなどをやるそうですね」

「利益還元というのですか、まあそんなようなことで、あの店の儲けはほとんど吐きだしているのですよ」

「それは大変ですねえ」

伊島はいたわるように言った。

中原という町が理想的な小都市に成長したかげには、駒田嘉平のような人物が、損得ぬきで働いているらしかった。

また花火があがった。